

## 都市を耕し「食」と「農」を考える

NPO法人千葉県市民農園協会は7月22日、「千葉県市民農園協会第159回研究会」を千葉市稲毛で開催した。

代表を務める廻谷義治氏は、市民農園の創生期から運営に係わる県の元農政職員だ。

研究会は「千葉県を、市民農園活動の発祥の地の一つと認識し、世界へと活動を発展させる」ことを目的に、

1992年に設立された。

この日のテーマは「野菜の種子の育成について」。

種苗関係業者は、集まった約10人の参加者に対し、「野菜の品種改良は、流通の要望に従っている」などの話を披露した。

主催者は「都市を耕す」とは、私たちに体を通して『食』と『農』の大切さを教えてくれる」と活動の大切さを説いている。

### 休耕田再生させる「マイ田んぼ」

千葉県認定のボランティア団体として里山の整備活動を続けてきた「アルカディアの里」が、米を自給したい都市生活者のために発足したのが「ソーサプロジェクト」だ。

これは、匝瑳市の放棄されかけていた谷戸田を「マ

イ田んぼ」として都市生活者に幹旋するというもの。

米の栽培には、冬季も水田に水をはり、土も耕さない「冬期湛水不耕起栽培」を用いる。

北米の干ばつに端を発した世界的な穀物の需給逼迫が懸念される中で、都市生活者による休耕田再生が注目を集めそうだ。

### 埼玉、地域自治体が有機農業支援

埼玉県鶴ヶ島市で「つるがしま つながる大豆プロジェクト」がスタートした。

これは、一般市民が、資金を出し合い新規就農者の畑で、大豆の有機栽培を築きながら農家を支援する一種のトラスト運動だ。

7月に開催された初回の種まきには、1区画2500円の参加枠に17口の応募が集まり、約20人が参加した。企画運営は、「つるがしま有機の会」と地域協働推進機構が共同で行う。

市役所も有機農業への市民参加をサポートするこの施策は全国でも稀だ。

市の産業振興課は「以前から就農者支援に力を入れ、研修や農地貸借の幹旋、経営指導などにあたってきたが、さらに農産物の安全で美味しいイメージを発信したい」と意欲的だ。

## 金子美登氏が指導する有機野菜塾

地域循環型有機農業で有名な「霜里農場」(埼玉県小川町)が、開催するのが「しもざと有機野菜塾」だ。農業を問わずに害虫を防ぐ方法などを丁寧に解説する。

受講料は1回2000円だが、今シーズンには既に定員に達している。

農場主の金子美登氏は、40年間、有機農業を実践し

てきており、「今後は、都市生活者の力も借りて里山や耕作放棄地の再生にも力を入れたい」と意気込みを語る。



運営は、小川町に住む若者が中心となり行う

### 秋は「平勤休農」ライフスタイルを

「都市生活者の農力向上委員会」は、10月から11月にかけて秋の「平勤休農キャンペーン」を展開する。「平勤休農」とは、半農半Xならぬ、「平日働き、休日は農を楽しむ」ライフスタイルのこと。

フェイスブックなどで、市民農園や体験農園、援農先の農場などを紹介する。非日常としての援農を促すのではなく、日常生活の中

に農作業を取り込むことが目的だ。そこから、新たな地縁が紡がれることにも期待している。今シーズンは、関東一円で農作業体験受入現場30カ所を推奨団体としてエントリーするのが目標だ。

同委員会は「不況が深刻化するなかで、必要なのは自助のノウハウと、共助のセーフティネットだ」と積極的な参加を呼び掛けている。